



日本遺産

鑿一丁から生まれた 木彫刻美術館・井波(富山県)

素材研究 (国内)

250年の歴史を伝える木彫刻技術 日本の伝統を背負う井波彫刻師の職人技

富山県の南西部に位置する南砺市井波は京都東本願寺の別院・瑞泉寺を中心とした木彫刻の町。寺を飾る木彫刻はいつしか人々の生活に溶け込み、井波の町そのものが「木彫刻美術館」と呼ばれるようになり、2018年に日本遺産に認定されました。



八日町通りと瑞泉寺。参道沿いには様々な木彫刻が見られます



瑞泉寺山門の「雲水一足龍」



人気の木彫刻体験



職人の技が受け継がれています

瑞泉寺の再建が職人を生む その技術は全国にも

井波の八日町通りは江戸時代の面影を残す瑞泉寺の表参道。通りの建物の軒先や看板には木彫刻の龍や七福神、鳳凰などが見られます。なかには年月を感じさせる風合いもある白木の木彫刻は、木の温もりが心を和ませる一方、龍の鱗や鳥の羽、表情など、時には300種の鑿を使うてつくり上げるといふ、精緻な彫りに驚かされます。

井波の木彫刻誕生は、1762年の大火で焼失した瑞泉寺の再建がきっかけでした。このとき京都の本願寺から派遣された彫刻師の技が、井波の職人に引き継がれていったのです。彼等の技術は神社のほか家屋の欄間や軒の飾り、商家の看板など、次第に人々の生活へと溶け込み、綿々と受け継がれていきました。例えば井波では男の子が生まれると天神様の木彫刻をつくって飾る習慣があり、今でも何体もの天神様が並ぶ家があるそうです。

現在井波には100軒以上の木彫刻工房があり、全国から集まった職人約200人が技を磨いています。注目すべきはこの技術、実は井波ばかりではなく、例えば現在再建中の名古屋城の本丸御殿の欄間や、関西地方のだんじり祭りの山車、法隆寺の釈迦三尊像の台座複製など、日本の様々な場所で用いられていることです。「井

波の木彫刻技術は日本の伝統文化保存修復も支えている」という井波日本遺産推進協議会会長の三谷直樹氏の言葉にも頷けます。

旅行形態の変化で個人客にアピール

井波の観光は、かつては瑞泉寺を中心とした団体旅行が主流でしたが、近年の旅行形態の個人化に伴い町の観光素材を見直し、日本遺産認定を機に「木彫刻の町」として新たな一歩を踏み出しました。

瑞泉寺の木彫刻技術を中心に、寺社の火災の原因となる「井波風」といわれる強風を防ぐための壁、寺の位置を参道からずらして立てた町づくりなどを一つの物語としてアピールするほか、木彫刻体験プログラムも造成。「ベッド&クラフト」として宿泊と木彫刻体験をセットで提供する工房も出てきた」と三谷氏は話します。また首都圏のアンテナショップや物産展でPRを展開したところ、彫刻の見事さもあり雑誌やテレビの取材も増えたとか。

今後は「日本国内の認知度を高めたいうえで、訪日旅行者向けに情報の多言語化やガイドの整備などを図りたい」と三谷氏は語ります。



石置もみごとな八日町通り



町の中心である瑞泉寺